

# 昏睡

作 永山智行

かくて  
人はふえかつ増して  
地に満ちた……

何もない

はじまりすらあったのか  
今となつてはもうわからない

けれど

おわりを認識することは  
できるのかもしれない

認識し

記述したところで

おわりの向こうには

誰もいないけれど

想像せよ

風が吹く

その中に

無数の棺が横たわる

さて……

やがて夜になると

おびただしいほどの

男と女の死体が

累々と横たわる

世界中

いたるところで

ある者たちは睦みあい

ある者たちは背を向け

ゆつくりと死んでいく

朝が来て

朝が来たとして

本当にその死体は

生き返るのだろうか……

七 戦場

男 つつつまり俺たちは敵を倒さなければならなかった

あいつらを

お前らを

ばばばくだん

まます俺たちの一人が殺された

だからお前らの一人を殺した

それから俺たちの二人が殺された

だからお前らの二人を殺した

俺たちの三人が殺された

お前らの三人を殺した

お前はいくつだ

十四

男 しし知ってるはずだ

これは続いてきた

お前の生まれる前から

ええ

男 ちち血は血によって贖わなければならない

ばばばくだん

あなたは

男 喋るな

男 ここれはいわば約定だ

俺たちは生まれた

産み落とされた

ここに

ここに

ここに

男 いいつか俺たちは去る

ここを

な何事かなさねばならない  
ここで

男 約定 いわば約定だ

女 あなたはおいくつなのですか

男 あるいはそうだ

女 け契約と言ってもよいだろう

男 か神と我々の永遠の契約

女 おいくつなのですか

男 ばばばくだん

女 そう言ってるのか お前は

男 わかりません

女 (女を殴る)

男 お前のその腕はどうした

女 何故手首から先がないのだ

男 しかも両腕とも

女 多分あなたのお父上でしょう

男 私の両の手首を切り落としたのは

女 そのあなたの顔に似た

男 憎しみを湛えた顔でしたもの

女 お前の言葉はわからない

男 私は今 掌を広げあなたに求めている

女 見えますか

男 ほらこうして広げて求めている

女 それから

男 こうして握ってみましょう

女 あなたへの憎しみです

男 これがあなたへの憎しみです

女 見えますか

男 なくなってしまった私の右手と左手が

女 それでは今

私の右手は広げられていますか

私の左手は握られていますか

私は求めているのですか

私は憎んでいるのですか

男 おお前の話す言葉はわからない

女 あなたはおいくつなのですか

男 なな何を答えればいいのか

何かをお前が訊いていることはわかる

けれど何を訊いているのか

そそそれはわからない

女 あなたはいつたいおいくつなのですか

男 (女を殴る)

ここに言葉はいらないのだ

おお俺たちはこうしてわかりあっている

おお俺たちは おお前らを憎んでいる

おお前らは おお俺たちを憎んでいる

女 (両手を男に向けて突き出す)

男 何がある その右手の掌の中に

何がある その左手の掌の中に

女 爆弾

男 もう一度

女 爆弾

男 もう一度

女 爆弾

男 お前の話す言葉はわからない

女 (静かに両手を下ろす)

遠く飛行機の音が微かに聞こえる

男 俺の父親はここで死んだ

首を切り落とされ ここで死んだ

女 私は父のことを知らない

私が生まれた時 父はもうそこにはいなかった

男 父親は生まれた

ある日 だ

戦いの中 むこうで

そして父親は育った

その父親とその母親に愛されながら

青年になった

恋をした

おお俺が生まれた

そして父親は 男たちが皆そうするように

ここへやってきた

血を流したのだろう 誰かの

誇り

怒り

祈り

民族の だ

だから血を流したのだろう 誰かの

贖い

そのために 父親も血を流した

首を切り落とされて

父親は死んだ

ある日 だ

女 父は現れた

ある日

らしい

なにしろ私は生まれていなかった

恋に落ちた

のではないかもしれない

けれど求めた  
激しく

ここにいた若い女を

敵であるはずの若い女を

母 だ

父は去った

ある日

らしい

なにしろ私はまだお腹の中にいた

若い女の

その

若い女は

母となり

けれどすぐに死んでしまった

らしい

なにしろ私はまだ生まれたばかりだった

いったいお前は何を語っている

とお俺にわからないその言葉で何を語っている

どうしてあなたは求めないのですか

父が母を激しく求めたように

そして私が生まれ

今ここにいるように

生まれるはずの生命が叫んでいるのです

生まれるはずの新しい血が

すべてはあなたが求めるところからはじまるのです

求めてください

求めてください

求めてください

新しい血が生まれるはずです

あなたと私の間に

あなたたちと私たちの間に

男  
(女を殴る)

しし静かにしろ

飛行機の音が小さく聞こえる

男  
ばばばくだん

女  
私のこの手のせいですか

何か恐ろしいものが私の中にある

なくした右手の代わりに赤いものが

なくした左手の代わりに黒いものが

だから求めないのですか

男  
とお俺たちの飛行機がやってきた

女  
あのやり方ではだめなのです

私の中へ

届くように

深く

新しい血へ

それはたどりつく

男  
とお俺たちの飛行機がやってきた

とお俺はこれから表へとびだし

こここの旗を降る

とお俺たちの飛行機に見えるよう

精一杯

そそそうすると俺たちの飛行機が落としてくれるのだ

ばばばくだんを

女  
あなたはおいくつですか

男  
とおとおお

女  
あなたはおいくつですか

男  
そそそそ

女 あなたはおいくつなのですか  
男 ばばばばば  
女 (両手を男に向けて突き出す)

私は今 掌を広げあなたに求めている  
見えますか

ほらこうして広げて求めている  
それから

こうして握ってみましょう  
あなたへの憎しみです

これがあなたへの憎しみです  
見えますか

なくなってしまった私の右手と左手が  
それでは今

私の右手は広げられていますか  
私の左手は握られていますか

私は求めているのですか  
私は憎んでいるのですか

十四だ  
お前はそれを訊いたのか

女 (微笑む)

飛行機の音が大きくなる

男 ここだ

ここに落とすんだ  
ばばばばくだん

女 (泣く)  
男 さあ

男 もう一度  
もう一度

啞えるんだ！

六 文明

男 じゃあとにかく見ておいてくれ  
女 何を ですか  
男 だから 私がいつ眠ったか をだよ  
女 ああ そうでした  
男 先生にそうやって言われたんだ  
睡眠は  
きっかり七時間五十分がいいんだって  
さっき話して聞かせただろう  
七時間五十一分でもいいじゃないし  
まして  
七時間四十九分などもってのほかだ  
と  
だからお前は見ておく必要がある  
私が眠った瞬間を  
そこから  
きっかり七時間五十分後に  
起きなければならぬんだからね  
私は  
女 でも どうやったらわかるんですか  
つまり  
男 (あなたが眠ったということが  
そりゃ簡単だよ  
私に  
話しかけさえすりゃいいんだから  
女 ああ そうですね  
男 それで返事がなければ  
眠ったということさ  
女 なるほど

男 でも気をつけてくれ  
睡眠時間はきっかり七時間五十分なんだ  
七時間五十一分でもいいじゃないし  
七時間四十九分でもいいじゃない  
女 どうすればいいんですか  
男 だからさ  
だから気をつけて欲しいんだ  
女 でも私  
男 その一分を間違えてしまうかもしれません  
うん  
男 それもちゃんと考えてある  
つまりこうだ  
お前は一分毎に  
私に話しかけるんだよ  
女 そうすれば  
その一分を間違えることはない  
女 あなた  
男 何だ  
女 いえ 話しかけてみたんです  
男 まだだ  
起きているだろう  
私  
女 こうしてお前に話しかけているんだから  
目だつて開(あ)いている  
女 ああ そうですね  
男 お前にはそういうところがあるからな  
女の時だつてそうだ  
女の あの時って  
男 結婚式のとき  
女の ああ

男 うん  
女 そうでしたね  
男 何の話かわかってるか  
女 だから結婚式でしょ  
男 そうだ  
女 結婚式のほら あれでしょ  
男 うん そうだ あれだ  
女 あなたのお父さんが酔っ払って  
男 え  
女 何  
男 私はお前の話をしているんだ  
女 え そうなんですか  
男 そう言ったじゃないか  
女 そうでした  
男 もういい  
女 とにかく  
男 あなた  
女 何だ  
男 いえ  
女 もう一分経ったかと思いき  
男 だからまだだと言ってるだろう  
男 起きている  
女 私は  
女 見ればわかることじゃないか  
女 さあ  
男 さあ って何だ  
女 私には起きているように見えて  
女 本当は眠っているらしいや  
女 そういうこともあるかな  
女 と思ひまして

---

男 ない  
女 話を進めるぞ  
男 ええ  
男 私が眠った瞬間はわかったとして  
女 問題はここからだ  
男 つまり  
女 その瞬間からきっかり七時間五十分後に  
女 私は目覚めなければならぬ  
女 どうやって目覚めるか  
女 まさか お前がずっと起きておく  
女 というわけにもいくまい  
女 ええ  
男 先生がこういうものを貸してくれた  
女 何ですか それは  
男 名前は うん  
女 忘れてしまった  
女 それで  
女 それは一体  
女 そもそも  
男 何ですの  
女 つまりだ  
男 この金の部分が時間を示し  
女 この銀の部分は分を示す  
女 この金の部分を七つ進め  
女 この銀の部分を五十進める  
女 するとそれは  
女 七時間五十分  
女 ということだ  
女 その時から  
女 きっかり七時間五十分後



女 どうなるんですの  
男 眠っている者を起こす

男と女  
しばらくそれを見つめる

男 素晴らしいものだ  
そう思わないか  
先生はおっしゃってた  
これが文明というものだ  
と

そのおかげで我々は  
時間というものを考えなくてもすむようになる  
と

女 あなた  
男 私は起きているぞ まだ  
女 いえ

そうじゃないんです  
あなたは先刻まっきこうおっしゃった  
これは  
眠っている者を起こすのだ  
と

男 ああ 言った  
女 私

それがどうしてもわからないんです  
これは  
どうやって

男 眠っている者を起こすのですか  
それは  
私もまだ

女 聞いていなかった  
たとえば私は

あなたをお起こしする時  
「あなた」  
「あなた」

あなたの肩にとりすがり  
そう申し上げます  
これもそうやって  
あなたの肩にとりすがり  
そうではないだろう  
男 音

そうなんじゃないだろうか  
その時が来たら  
音で

知らせてくれる  
そういうものなんじゃないだろうか  
女 その音とは

たとえばどのような  
男 わからない  
女 「あなた」  
「あなた」

男 おそらくそうではないだろう  
女 ならば音とどのような  
男 見当もつかぬ

男と女  
しばらくそれを見つめる

女 本当に音が鳴るのでしょうか  
いえ

そもそも

七時間五十分後

これは

本当に

何かを為すのでしょうか

先生がおっしゃったのだ

間違いはあるまい

これは文明なのだ

我々は何も考えずとも

いいはずだ

女 私

起きてみましょうか

どういうことだ

女 男

いえ ですから

起きて見ておくんです

七時間五十分後

これが何を為すかを

音かもしれない

あるいは

私たちが思いもよらない

とんでもない何事かを

為すかもしれません

ですから

これが何かを為す

男 その少し前に

起きて見ておくんです

それはいい

けれど実を言うと

お前 私

女 だめです

だってあなたがおやすみにならないと

これは動きたさないので

男 眠ったふりして

起きていようか

女 それは構いませんが

でもあなた

お返事はなさらないでください

男 どういうことだ

女 あなたがおっしゃったじゃありませんか

私が話しかけ

あなたのお返事がなければ

それは

あなたが眠ったということだ

と

男 ああ そうだった

しかしお前

私はやはり自信がないよ

女 何がです

男 いやつまり

眠ったふりして

七時間五十分も起きておくことがさ

だって何もしないんだからね

ただ眠ったふりをしておくだけなんだ

それで

七時間五十分

やはりいつか

私は本当に

女 眠ってしまうような気がする

いいですよ

本当に眠ってしまったも

私は誰にも言いやしませんから  
そのことを

男 だめだよ お前

本当に眠ってしまったら

七時間五十分後

これが

何を為すかを

見ることができないじゃないか

女 ああ そうでしたね

男 こうしよう

私が眠った後

お前はこれを合わせ

眠る

そうして

お前はまた起きる

それから

これが何事かを為す

その一分前

私を起こしてくれ

女 そうしたらあなた

睡眠が

七時間四十九分になってしまふんじゃないやありません

男 そうだ

よく気がついたな

お前らしくもない

こうするんだ

この金の部分を七つ進める

これは同じだ

それから

この銀の部分を五十一進める

いいか

五十ではなく五十一だ

それがどういふことかはわかるか

女 七時間五十一分

ということですか

男 いいぞ

では

その一分前に

お前が私を起こせば

女 七時間

五十分

男 その通りだ

女 そうですね

男 ならば

早速試してみよう

早速といつても

七時間五十分後だが

いいか

私は眠るぞ

女 はい

男 よく見ておくんた

私が眠る

その瞬間を

そして

お前もすぐに来い

女 ええ

男

目を閉じる

女 あなた

男 何だ

女 まだ ですね

女 あなた

男 まだだ

女 あなた

男 もう少し

女 あなた

男 来いよ お前も

女 あなた

女 あなた

女 あなた

女 あなた

女 それは本当の眠りなんですの

それとも

眠ったふりをなさっているんですか

女 あなた

女 ねえ

私もなんだか

---

眠たくなつてしまいました  
このまま私

眠つてしまつてもいいですか  
あなた……

五 退屈

男 謀叛である

それはおそらく

民衆が蜂起したのであらう

女 残念ながら陛下

そのような事實はございません

男 何も

何も起きてはおらぬと

女 ええ

あなたと私

いつものように

このベッドで

微睡んでおりました

ただそれだけです

男 わしとお前

このベッドで

女 ええ

何も

何も起きなかつたのか

お前のその体にも

女 ええ

お前の手は何処にある

男 ここです

微睡みの中

お前は握つたのか

女 陛下の仰せのとおり

握り

撫で

吸い

けれど何も起きませんでした

陛下のその体にも

男 そうか

あなたは何をしてくださつたのですか

陛下

微睡みのその中で

男 わしも

お前の言うとおりの

擦り

掴み

舐め

確かそうしたような気がする

女 けれど何も起きませんでした

私のこの体には

男 そうか

もうよい

ともあれまずこの微睡みのベッドから抜け出ることにしよう

女 もちろんそうなる権利も自由もあなたにはございます

この王国の国王であらせられます故

けれど陛下

そうして一体

何をなさるおつもりですか

男 ああ そうか

わしには

何もなすべきことはないのであつた

女 ええ

何もございません

戦もなく

国は

男 平穩に統治されているのですから  
わしには  
なすべきことが何もない

女 ええ

男 道化は

道化はおらぬのか

あの阿呆は

女 あなたが

殺しておしまいになりました

もう三月も前のことです

男 ああそうだった

あれからもう三月も経ったのか

昨日のこともようでもあるし

もう二十年も昔のこともようでもある

そもそも今は一体いつなのだ

今日なのか

昨日なのか

明日なのか

女 さあ

男 朝なのか

昼なのか

夜なのか

女 私にはわかりません

時を刻み知らせる者もおりませんので

男 そうか

女 ええ

男 さて

女 どうする  
何をでございますか

男 つまり  
今ここにある

この時をだ

そうだ

また あの勇ましい武人たちを

招ぼうではないか

そのすべての肉が

若い滴で浅黒く光り輝く

あの武人たちを

決闘をご覧になるのですか

男 ああ

女 けれど

確かもう若い武人たちはおりません

あなたが打ち殺しておしまいになった

剣を持って決闘した男たち

敗れた者は死に

そしてあなたは

勝利の栄光を手にいれた者に

私との同衾を命じた

あなたはそれをご覧になり

その者が果てる寸前で

いつも殺しておしまいになった

もう若い武人たちはいないのです

長い微睡みの中で

そのようなことは忘れてしまった

そうなのか

もういないのか

女 ええ

男 道化がもういないのと同様に  
これではどうだ

つまり目合(まぐあい)だ

またお前の下女や

わしの下男を集め

それをさせるのだ

あれはなかなか時を忘れさせるものだった

勿論

お前の女一人と

わしの男一人でもよい

わしの男二人と

お前の女一人も

よいだろう

もつと大勢のものも見て楽しんだ

そんなこともあつた

ですが

もうそれも叶いませぬ

今は

何故

下女らはもうおりませぬ

その辱めの後

殆どの者は自ら命を断ち

また残りの者たちは

家族の者たちが

穢れを拭わんと

生きたまま土に埋めたとか

一体

では

誰がいるというのだ

例えば

そうだ

料理を作る者たち

その者たちはあなたが

では音楽家はどうか

それもあなたが

からくり仕掛けの機械を作る者たちもいたであろう

それもあなたのお気に召さぬことがあり

男 農民たちは

女 半年前の隣国との戦に

あなたは兵として農民たちを

送りました

恐らくその時に

商人たちは

女 戦の際

隣国よりの兵に

男 誰がいるのだ

一体

この王国に

その国民として

一体

誰がいるというのだ

女 いませぬ

もう誰も

男 お前はそれを知っていたのか

女 兄上

男 何だ

女 あなたと私は

同じ血より生まれ出でた

二つの体

その二つの体が お互いの初めてを食った満月の夜

そしてその果つることなき悦楽  
けれど

その日から

私たちは失いはじめたのです

あれほど満ちていた月が

日に日に欠けていくように

最初に先王であった父が死に

妃であった母も死んだ

私たちは官能を失い続け

二度とあの夜の悦楽を手に入れられないままにいる

この国は国民を失い続け

もはや

私

そしてあなた

それだけが

この国に残された

国民のすべて

つまり

この王国とは

もはや領土のことではなく

まして国民のことでもなく

わしのこの肉体

それだけがわしに残された王国であると

ええ

そうか

長い微睡み中

わしはそのことを

忘れていたのだろうか

ならばお前

隣国にも聞こえるよう

高らかに宣言しようではないか  
わしは

このわしという肉体の王国の

たった一人の国王である

そして

お前は

お前という肉体の王国の

たった一人の女王である

男

そうして

ついに我々は

本当に何もすることがなくなってしまうた

女

ベッドへ

微睡みへ

戻りましょう

男

あれから

どのくらいの時が過ぎた

私にはわかりません

時を刻み知らせる者がおりませんので

女

ともあれまずこの微睡みのベッドから抜け出すことにしよう

もちろんそうなる権利も自由もあなたにはございません

この王国の国王であらせられます故

けれど陛下

男

何をなさるおつもりですか

ああ そうか



わしには  
何もなすべきことはないのであった  
女 ええ

何もごさいません

戦もなく

国は

平穩に統治されているのですから

男 わしには

なすべきことが何も無い

女 ええ

女 誰

男 聞こえたのか

女 ええ

あなたにも

男 ああ

聞こえた

女 でも一体誰が

男 それは分からね

けれど

確かにその通りだ

女 ええ

確かに

男と女

互いの首に手をかけ

絞める

男 時

もし

それが声を持つとすれば

あのような声だったかもしれぬ

女 時

そうです

あれは確かに

時

その声でした

男 死

わしは

そうだ

まだ

死ぬことだけはやったことがなかったのだ

女 死

私も

そう

まだ

死ぬことだけはやったことがなかった

しかし

お前

これは

そう

快樂といつてもよいものかもしれない

女 私

私の体が

はじめての時の

興奮を

今また感じています

男 そうだ  
見ろ

月はまた満ちたのだ  
そうして

我々は

この王国から外へと出るのだ

この世に生を受け

それ以来

決して出たことのなかった

この王国の外へ

女 あの音は何

あの

猛々しい

静かな

笑い声

いえ

泣いている

怒り

そのすべての音

あれは

男 謀叛である

それはおそらく

民衆が蜂起したのであろう

けれど

女 亡霊だ

民衆が亡霊と化し

我々が

彼らの王国へ行くことを

阻もうとしているのだ

女 兄上

私たちは

行けるのですか

男 どうでもよい

そのようなことは

今はただ

この快樂のみを

貪るのだ

女 ええ

男 もっとだ

女 もっと

男 もっと

女 もっと

男 もっと

女 もっと

男 もっと

女 ああ

男 ああ

女 ああ

四 接合

男 せーの  
女 せーの  
男 どうだ  
女 全然  
男 もう一回  
女 ええ  
男 せーの  
女 せーの  
男 どうだ  
女 同じ  
男 もう一回  
女 はい  
男 せーの  
女 せーの  
男 だめだ  
女 やり方をかえましょう  
男 どうやって  
女 私このこれを握って動かないようにしてるから  
男 あなたの方が動いて抜いてみて  
男 よし  
女 いくぞ  
男 せーの  
男 だめだ  
男 おい 交替しよう  
女 俺がそのそれを握って動かないようにしてるからお前の方が動いて抜いてみる  
女 だめよ

男 どうして  
女 私そんなに力ないもの  
男 とにかくやってみろ  
女 だめならだめでいいじゃないか  
女 いくわよ  
男 ああ  
女 せーの  
女 やっぱり無理  
男 どうしてこんなことになったんだ  
女 あなたのそれ もうちよつと小さくならないの  
男 お前のそれ もうちよつと広げられないのか  
女 いつもはすぐ小さくなるのに  
男 ああ そうか  
女 何よ  
男 そういふ風に思ってたのか  
女 この男のはすぐ小さくなる  
女 ちつとも長持ちしない  
女 早過ぎる って  
女 何言ってるの  
男 そんなこと言ってるわい  
男 けど  
女 そんなようなものの言い方だった  
女 やめてよ  
男 否定しないのか  
女 そうか  
男 お前 否定はしないんだな  
女 つまり  
女 そう思ってたと思われてもいいと思ってるわけだ  
女 そういふことじゃなくて

男 どういうことだ

女 じゃあ あなたはどのような  
あなただって 私のことどう思っているんだか  
そりゃ

その最中ずっとそう思ってるわけじゃないかもしれない  
けど ふつと思ったりすることがあるんでしょ  
私について

頭を横切る何かがあるわけでしょ  
ね

否定はできないわよね

男 おいおいちよつと待てよ

女 まあまあその話はおいてだな

男 いつもそう

あなたはいつもそうやって事をうやむやにしていなくなる

男 それはそうかもしれないが

女 かもしれない じゃなくて

そうなの

あなたはそうなの

男 まあ そうだとしてだ

女 だから そうだって

男 ああ そうだ

そうだけれども

今はやめよう

ちよつと淋しい気持ちになってきた

女 何が

男 つまりこの格好で口論していることがさ

女 どうするの

男 少し小さくなったような気がする

女 じゃ私も広げてみる

男 できるのか

女 できないけど

気持ちの上でね

とりあえず息を吐いてみるわ

男 せーの

女 せーの

男 どうだ

女 だめ

女 やっぱり誰か呼びましょうか

男 だめだ

女 どうして

男 妻に知られる

女 ああ

男 お前だって

女 夫に知られる

男 そうさ

女 ね

男 何だ

女 妻とはいつ別れるの

男 お前だって夫とはいつ別れるんだ

女 あなたが妻と別れたら

そういう約束だったでしょ

男 別にお前が先でもいいんだぜ

お前が夫と別れたら

俺も妻と別れる

女 じゃあこうしましょう

明日

せーので一緒に別れましょう

男 ああ

明日が来ればな

女 どういうこと

男 だって俺とお前は今こういうことになってる

女 このままだと

女 明日はやってこないだろう

女 明日は来る

男 どうして

女 ちようどいいじゃない

明日

ここに二人を呼びましょう

男 二人って

女 あなたの妻と私の夫

そして見てもらいましょうよ

これ

まあまあこういうことになったんで

どうかそのよろしく

なんてあいさつして

男 このままか

女 三つ指ついて

ってわけにもいかないでしょ

男 せめて頭は下げておいた方がいいかもな

女 どうやって

男 だからこうして

女 じゃあ私も

女 どうしたの

男 なんだかまた淋しい気持ちになってきた

女 とりあえずもう一回やってみる

男 せーの

女 せーの

男 だめだ

女 ね

男 何だ

女 水飲みたい

女 喉渴いた

男 だって

女 一緒に来て

そのコップの中に入ってるから

男 このまま動くのか

女 この格好のまま

女 だってそうするよりほかないでしょ

男 ああ また淋しい気持ちに襲われそうだ

女 おいしい

水がこんなにおいしいのは

きつと私とあなたがこんなことになっているからね

男 ああ

女 飲む あなたも

男 いや いい

女 渴いてないの

男 そういうわけじゃないけど

女 じゃあ飲んでみて

男 今はだめだ

女 どうして

男 つまりその

あれだ

水を飲むと

その

それによって引き起こされる

女  
いわば催しもののような  
もしかしてあなた

まさかそんな  
だからそれ

そう

なの

男  
大丈夫だ まだ

我慢できる

女  
でも もしこのままだったら

男  
それはだって仕方ないだろう

つまり

そういう構造になっているんだから

男は

女  
嫌  
それだけは嫌

早くどうかしませう

男  
どうにかすると言ったって

女  
引っ張って

いいから

早く

男  
せーの

女  
せーの

男  
せーの

女  
せーの

男  
せーの

女  
せーの

男  
せーの

女  
せーの

男  
だめ

女  
だめ

男  
あ

女  
え

男  
満月だ

女  
満月

男  
二人きり

そうじゃない

そんな気がする

女  
何が

男  
だからこの時間

世界中

あちこちで

二人が

こうなってしまうている

感じる

きつとそうだと

女  
あなたと私

二人

だけでなく

男  
ああ

女  
じゃあ もしかすると

これからはじめる

二人たちも

男  
みんな

ああ

こうなるね  
きつと

女 そう

世界中で

男 ああ

ぜんぶの

二人が

女 ね

男 何だ

女 外に行きましょう

男 外に

女 ええ

だって

外に行きたい

男 このままか

女 なんだか愉快だと思わない

だから

このまま

外にでかけましょう

男 そして歩くのか

女 ええ

歩いてみましょう

男 難しいな

女 ちよつとね

男と女

歩きだす

女 ね

男 何だ

女 私

あなたのこと

愛しているかもしれない

男 俺も

お前のこと

愛しているかもしれない

三 時刻

男

もうすぐ彼がやってくる  
彼女はここに眠っている

もうすぐ彼が

彼女はここに

水を飲もう

手を洗おう

いったいどれくらい時間が過ぎたのだ

あれから

いったい

彼女はここに眠っている

そもそもの最初から

思いだそう

いや

思いだせるのか

そもそものはじまりから

ぼくが

彼女の

中にいた時から

彼女の

中に

生まれた時から

愛されることを愛する女

彼女はそうだった

彼女は生まれ

彼女は愛され

二十歳になった

彼女は出会い

彼女は愛され

結ばれた

一人の男と

夏の暑い昼間

汗がこぼれる

こぼれた滴

突き上げた男の先から彼女の奥深く生まれた

その瞬間

もう一人の男

ぼく

という心臓

のはじまり

水を飲もう

水を飲む心臓

いったいどれくらい時間が過ぎたのだ

それから

いったい

男の手の中にいた

彼女の中にはいたのだが

はじめて

男の手の中にいた

見つめる微笑



見つめられる  
見つめる微笑  
見つめられる  
微笑んだ

と思う

涙  
こぼれた滴

そういえば

彼女の乳房は透き通り

彼女の乳房は白く

彼女の乳房はやわらかく

彼女の乳房は温かく

白い滴をこぼしていた

飲み干す

こぼさぬよう

最後まで飲み干す

それから眠る

そんな日々

いったいどれくらいの時間が過ぎたのだ

そして

それから

愛されることを愛する女

ぼくは彼女を愛したか

愛されることを愛する女

男は彼女を愛したか

ほんとうにほんとうにそうしたか

ぼくはしかし小さすぎた

そして男は年をとりすぎていた  
愛されることを愛する女  
勢いよく飛び散った滴

あの日

そんな若さが彼女を愛した

夏の暑い昼間

も

やがて

そんな時間変わる

夕立

彼女の顔に 体に

靴も履かず

その中へ彼女は飛び出していった

裸足で踊る

彼の

夕立の滴を浴びて

男が死んだのはそれから間もなくのこと

男は死んだ

男も死んだ

大抵のみんなはそうしていなくなる

おじいちゃんもいなくなった

おばあちゃんもいなくなった

迎えにきたよ

彼女はそう言い

ぼくはまた彼女と暮らしはじめた

けれど

彼女と眠る

そうすることさえできなかった  
彼

とかいう

彼

が

いつもやってきた

そして彼女と眠る

もう大きくなつたんだから

そう　もう大きくなつた

そうだ　もう大きいんだ

ぼくは思う

ようにした

だから

ひとりで眠る

右手で左手を抱き締め

右の足を左の足に絡め

胸に膝を抱え

そうして

ひとりで眠る

いったいどれくらいの間が過ぎたのだ

それから

いったい

夜

暗い夜

彼が吸う息

彼女が吐く息

彼が吸う息

彼女が吐く息

それを何遍繰り返したか

それを聞きながら

いったいどれくらいの間が過ぎたのだ

あれはでも仕方なかったんだ

ぼくはまだ四歳なんだ

夕食の時にこぼしたコップの水

食卓の端からしたたる滴

ぼくを殴る彼の右手

ぼくを蹴る彼の左足

吐いた

吐いたんだよ

知らないだろうけど

夕食と

お昼のパンと

朝の牛乳も

ぜんぶ

ぜんぶ

ぜんぶ

なんだかわからない色の液体まで吐き出した

ぼくの口からしたたる滴

それを見て

また

ぼくを殴る彼の右手

ぼくを蹴る彼の左足

泣いた

泣いたんだよ  
知らないだろうけど

いっばい

いつまでも

涙がでた

また涙の滴が  
したたった

おしっこもらしちやった

彼の右手

彼の左足

彼の右手

彼の左足

彼の右手

彼の左足

……

いつまでも

飲め

飲み干せ

あいつは

彼は

そう言った

おまえが床にこぼしたその滴

全部飲み干せ

あいつは

彼は

そう言ってまた殴ったんだよ

おかあさん

ぼくはそうした

辛くはなかった

そこに広がるその滴は

おとうさんがあの日流した涙の滴かもしれない

それともおかあさんの乳房からこぼれた滴かもしれない

だからぼくはそうしたんだ

もうすぐあいつがやってくる

おかあさんはここに眠っている

もうすぐあいつが

おかあさんはここに

でもおかあさんはもう起きない

ぼくがおかあさんを殺しちゃった

血がいつぱい出たね

おかあさん

血の滴がね

ほらこんなに床いつぱい

ぼく水を飲むよ

ぼく手を洗うよ

隣で眠っている

おかあさん

おかあさん

隣で眠っている

いったいどれくらいの間が過ぎたのかな

あれから

いったい

そもそも最初から

やり直せないの

そもそものはじまりから

ぼくが

おかあさんの

中にいた時から

おかあさんの

中に

生まれた時から

ぜんぶの

滴が

こぼれる前から

ね

おかあさん……

やがて

女

起き上がり

時を遡るように

舞う

二 夢想

男 人々は困窮している

いつの時代も

人々は困窮しているものなのかもしれない

けれど

政を行うものは

決して

そのことを忘れてはならない

だから私は

人々とともにあり

わずかずつでも

その困窮の源を取り除いていきたい

そう思うんだ

女 ええ

もう五十年も昔になります

あなたがそうおっしゃって

志を立てられたのは

ああ

男 ああなたは

大層お働きになりました

お陰で

みなさんの暮らしも

以前とは比べものにならないほど

大変楽になりました

男 うん

ありがとうございます

女 お前に礼を言われることではない

私は私の信念に基づいて

働いてきただけだ

女 ふふ

男 何だ

女 私は懐かしいのです

確かにあなたは

いつもそういうお姿で

私にいろんな思想や哲学のことを

お話しくださいました

男 お前は驚かないのか

私がかような姿になつて

私だけが

五十年前の若者に戻ってしまったのだぞ

女 面白いじゃありませんか

長く生きていると

そういうこともあるんだと思うと

男 そういふものか

女 ええ

そういうもんです

男 だったら 私ではなく

お前ならよかつたんだ

女 何がです

男 こうして時を戻ってしまうのがさ

お前が若者に戻ればよかつたんだ

そうすれば

女 お前のその病気も

私は若者ですよ

五十年も変わらぬまま

あなたと初めて会った時のまま

男 馬鹿

女 時は流れるのです

川の流れが決して止まることのないように

こうしていても  
時は流れるのです  
あれ

男  
どうした  
女  
ふふふ

これあなたがおっしゃったことだったかしら  
長く一緒にいると

あなたがおっしゃったことと  
私が言ったことが

男  
どっちでもいい  
私でもお前でも  
私が言ったことと

お前が言ったことと  
そう変わりはない  
私がやったことと

お前がやったこと  
私と

お前  
そう変わりはない  
どっちでもいい

男  
そうかもしれないですね  
だからさ  
だから

女  
私でよかったんだ  
病気になるのは  
そしてお前が

女  
………  
朝に

女  
………  
朝に

朝に

朝に

朝になれば

そうなるかもしれないよ  
あなたはまたおじいちゃん

男  
私は娘に戻っているかもしれない  
買えるのか  
その権利は

金で買えるのか  
ならば税として  
人々より

その金を徴収しよう  
女  
いけませんよ

男  
私ひとりのために  
構うものか

そのぐらいいはしたっていいはずだ  
そのぐらいの恩恵を

あいつらは受けてきたはずなんだから  
女  
あいつら  
なんて

男  
あいつらは何もしない  
ただ

不平を呟くだけだ  
為政者のいないところで  
こっそりと

それを私が拾い上げ  
こうして豊かな暮らしができるようになったのだ  
けれどあいつらは

それをさも当然の権利のように言い  
私に御礼一つ言うわけでもない  
そしてまた

新しい不平を呟く

新しい不平を呟く

新しい不平を呟く

新しい不平を呟く

税といつても

私から受け取ったものを

私に返すだけのことだ

女  
けれど

やっぱり無理なんです

お金では買えないのですから

きつと

男  
……

こうしていても

時は流れる

女  
夜ははじまり

夜は終わる

そしてあなたは

男  
何だ

若い

ふふふ

男

女の手をとる

女  
いやですよ

男  
しわくちゃ

なのだなあ

その手は

恥ずかしい

女  
なあ

私は最近こう思うんだ

一体

私は誰を幸福にしてきたんだろうと

確かに

皆をそうしたい

と思つてきた

けれど

私が幸福にできるのは

せいぜい一人ぐらいなんじゃないだろうか

女  
二十歳の若者が考えることじゃありませんね

男  
私はその

せいぜいの一人を

せいぜい一人の幸福を

ずっと忘れていたような気がしてならないんだ

女  
誰ですか

そのお一人つて

あなたがずっと可愛がつてらした

あの若い方ですか

男  
おい

わかつてます

私は幸福です

多分

こうして

あなたの目の前で

いくことができるのですから

男

女の体を抱く

女  
おばあちゃんですよ

私は

ね

その若い人

男  
けれど

私は

君の体を愛する

こうして

強く抱き締め

やめろ

……

女 男 女

私に抱かせてください

あなたの

その体を

女

男の体を抱く

女 あなたのはじまりと

あなたの終わりと

そのぜんぶ

男 (泣く)

な

お前と一緒にいきたい

お前と一緒にいけないのか

二人が

一緒に入れる

棺

それを探そう

一緒に焼いてくれ

一緒に灰にしてくれ

お前と

私

どっちだって変わりはない

ならば

一緒に焼いてくれ

焼け

焼くん

お前と私

同じ棺のまま

この体

お前のと

私のと

一緒になることはできないけれど

灰になれば

混じりあい

どちらがどちらとも分からず

一つになれるんだ

さあ焼け

焼くん

残念ながら

二人が一緒に入れる棺はございません

まさか

そんなことを言うんじゃないな

作れ

大急ぎで作らせろ

そうだあいつらにだ

金が欲しいのなら

金はやる

だから

急ぐんだ

今夜中に

私と



この女

二人が入れる棺を用意し

そのまま

焼くんだけ

灰になるまで

灰に

灰に

……

女 あなた

男 ん

女 眠りましょう

男 このまま

女 ああ

男 朝になれば

女 このまま朝になり

私とあなたと目覚めれば

やはり

入れ替わっているかもしれない

あなたと

私と

男 ああ

女 眠りましょう

男 眠ろう

男と女

そのまま

目を閉じた

一 遺骨

男 そうしてついに私は

肉体ですらなくなってしまった

私は遺骨である

私は灰である

女 そうしてついに私は

肉体ですらなくなってしまった

私は遺骨である

私は灰である

男 おや

そこに誰がいるんですね

女 ええ

あなたもそこにいらつしやるんですね

男 私はここにいます

女 私もここにいます

男 風が吹くまでは

女 ええ

この次

風が吹くまでは

男 はじめまして

女 こちらこそ

男 はじめまして

女 いつからそこにいたんです

男 さあ

それはどうも

はつきりしませんわ

男 私です

いつからここにいたんだか

女 でも

思い出すことすらできない

生きて

いたんでしよう

男 ええ

生きて

いました

女 私も

生きて

いました

男 懐かしいですか

女 懐かしいですか

男 肉体

女 肉体

男 ええ

女 いろいろと

男 厄介ではありましたが

女 そう

男 なかなか厄介なやつではありました

女 本当に

男 でも

女 なかなか

男 楽しくもあつた

女 ええ

男 今となっては

女 ですが

男 音

女 音  
風 風  
風 風  
女 風  
男 風  
女 風  
女 音  
何も聞こえませんが  
いいえ  
まだ  
まだです  
そうですね  
世界は今  
音無き世界  
であるはずですが  
風は吹かない  
女 風は吹かない  
まだ  
それはもう少し  
まだもう少し  
先のこと  
男 お願いがあります  
女 お願いがあります  
男 あなたの肉体に触れてみたい  
女 あなたの肉体に触れてみたい  
女 けれど  
それは叶わぬこと  
慎重にやるんです  
男 慎重にやるんです  
女 そうすれば  
それは  
できないことではない  
女 慎重に

---

男 ゆっくりと  
私はまず  
こうして  
私の右手で  
あなたの左手に触れる  
女 あなたの右手が  
私の左手に  
男 指  
人差指  
中指  
薬指  
小指  
親指  
女 そのそれぞれに  
爪  
それから  
掌  
冷たい水  
それをあなたは  
その左手の掌と  
右手の掌を合わせ  
静かにすくい  
ゆっくりと  
飲み干すでしょう  
女 私は  
こうして  
この両手で  
あなたの顔に触れる  
こめかみ  
女 頬





女 男 女 男 女 男 女 男 女  
なる 風に 肉体は こうして 風に似ている この音は 風に似ている この声は  
(呼吸) (呼吸) (呼吸) (呼吸) (呼吸)

風 灰は  
風に巻き上げられ  
そして  
散っていった

眠る  
眠る

祈る  
祈る

今日を終わらせ  
明日を夢見る

やがて訪れる

昏睡

は

永い

祈りに

なるだろう

.....

---